

平和の俳句

戦後71年

たくさんの方々の応募をいただき「平和の俳句」は二年目を迎えました。隔月で掲載する特集では、沖縄の県紙「琉球新報」が、本紙の取り組みに賛同して昨年末から始めた「平和のうた」の入選作品も紹介していきます。次回の特集は四月下旬を予定しています。

速記せし軍事裁判凍つる日よ



森 和子さん(86) 東京都大田区

速記符号をパソコンで
原稿に起こす森和子さ
ん(東京都大田区)

判(東京裁判)。戦勝国の連合国が、東条英機ら日本の戦争指導者一十八人を裁いていた。入り口に立つ体の大きな米軍憲兵の前を、縮こまって通るのが苦痛だった。

速記は二人一組で、新人の森さんは法廷の中央で速記を取る「主」の記者を補佐する「副」の役割。後方の数段高いガラス戸の中から法廷を見下ろしていた。

裁判は英語と日本語で行われ、外国人の発言はイヤホン越しに同時通訳された日本語を聞き取った。

極度に緊張していたせいか、裁判の詳細はほとんど覚えていない。だが、被告人席に並ぶかつての日本の指導者たちは「弱々しい、みすぼらしいおじさん」に見えた。日本の勝利を信じて疑わない軍国少女だったわが身の落胆を反映したのかも知れない。

シャープペンシルで速記を取る自分の隣では、米国の女性速記者がタイプライターのような機械を打っていた。その違いを目の当たりにして「日本が戦争に負けたのは仕方なかったのかな」と劣等感をかみしめた。(矢島智子)

東京裁判 緊迫のペン

録音技術のなかった時代、人の話を正確に記録するには速記が頼りだった。簡略化した符号を使い、文字を書く何倍もの速さで内容を書き留めていく。今も国会では、本会議や予算委員会などで会議録を取る速記者の姿が見られる。森和子さんは、速記者として戦後の極東国際軍事裁判に立ち会った日々を詠んだ。

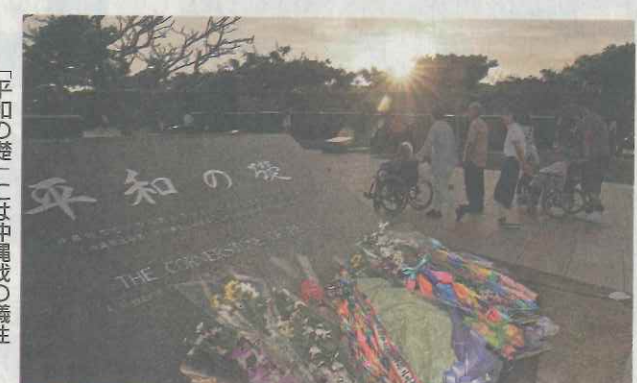
太平洋戦争末期の昭和二十年四月、森さんは十六歳で衆議院の速記者養成所に入った。若い男性は徴兵されてしまい、東京の下町は大空襲に遭ったばかり。同期生は皆、東京在住の女性十人ほどだった。初日に厳しい男性教師から「君たちが速記者として使い物になるのか疑問だ」と言われ、とても悔しかったのを覚えている。

敗戦を挟み、二年で卒業するところを、人手不足で三月月ほど繰り上げて卒業。昭和二十二年一月の通常国会から議場に出た。並行して通ったのが、東京・市谷の旧陸軍士官学校で開廷していた極東国際軍事裁



琉球新報の「平和のうた」は日曜日の朝刊一面で、俳句、短歌、川柳と沖縄の短詩「琉歌」を順番で紹介しています。琉歌は八・八・八・六音が基本です。島尻さんの作品にある「カジャデフー」とは、沖縄の祝

いの席で踊られる舞踊「かぎやで風」のことです。このように発音します。多和田さんの作品は、会いたいと思ってもかなわない、平和の礎に刻銘された親への思慕の念を歌っています。



「平和の礎」には沖縄戦の犠牲者の名前が刻まれている。沖縄県糸満市の平和祈念公園で

- 【俳句】冬の鷺まばゆき白を放ちけり 南城市 細 薫(56) 色の花びらひらく
- 【俳句】冬銀河地下に眠れる遺骨あり 西原町 澤 聖紫(71)
- 【川柳】戦争のない世の中をつみだそ 読谷村 高良 夢人(14)
- 【川柳】勝利呼ぶ辺野古で開いたカジャデフー 読谷村 島尻 卓(67)
- 【短歌】沖繩の一家総出の甘蔗倒し葉殻の上の 昼餉楽しむ 宜野湾市 多良間 典男(75)
- 【琉歌】行逢ひぼしやあても行逢ることならぬ 礎なていめる親よ徳ぶ 宜野湾市 多和田 吉雄(67)
- 【短歌】昼顔は基地のフェンスを攀じ登り淡紅 沖繩市 瑞慶村 悦子(66)

※年齢は琉球新報での掲載時。了解を得た作品のみ転載

一句に込めた 体験・思い

コロコロと首だけのひな焼野原
相原 文子(82) 横浜市南区
昭和二十年六月二十八日の深夜から翌日未明にかけて、長崎県佐世保市は米軍による大空襲に見舞われた。一人暮らした私と祖母は山へ逃げ、翌朝、町へ戻ったが、家は丸焼けになっていた。焼け跡には、しまつてあったひな人形の首だけがコロコロとたくさん転がっていた。不思議なことに顔は真っ白で、すすけていなかった。七十年が過ぎても、おひなさまと聞く、あのときの光景が思い浮かんでしま

「父さん」と呼んで毎朝茶をあげる
中田 邦生(79) 千葉県東金市
昭和二十年九月末、私が学校から帰ると見知らぬおじさんが家にいた。母に「あのおじさんは誰」と聞くと「ばか言っんじやないよ。おまえのお父さんだよ」とたしなめられた。父は私が物心ついたときには海軍に入っていて、一度、横須賀へ面会に行つたきりだった。私は父に甘えることができず、三十七年後、亡くなる間際の父に「俺は邦生に『父さん』と一度も呼んでもらえなかったことが一番寂しかった」と言われ、ぎくりとした。以来、毎朝、仏壇に向かい「父さん」と呼びながら、お茶と線香をあげている。

ふくふくと敗戦日にも綿の吹く
町野 静子(83) 千葉市花見川区
戦時中の子どもの時代は防空頭巾を携えて通学した。最初は薄かった頭巾も年々、頭頂部に綿を重ね、終戦のころには、げんこつでたたいても頭に響かないくらい厚さになった。肩や胸まで覆うほど大きく、重かったけれど、冬は座布団にしたり膝に乗せたりして暖を取った。当時、綿は家の畑のわきで作っていたが、今も観賞用に少しだけ育てて楽しんでいる。

記 木枯や反 作 知 漫画 絵を 二環 実験 たり 老ひし身を 自宅は にはさ 培、草 されて が入る 節を歌 みちのくに